

郷土館発

祈りの季節

津具行人原念仏堂、寒念仏の声が聞こえてきます。二十人ほどの女性ばかりの声です。一月五日の寒の入りに始まった四十八夜念仏は、二月二十二日の本供養(しまい供養)をもって終了します。この間、最初のハナ切り、二十四夜の中供養、最終日の本供養には全員が集まります。ほかの日は、当番がお茶とうをし、念仏をあげて四十八日間の供養を続けます。

ハナ切りとは竹の棒に紙を巻き、そこに色紙の花を切って付けたものを作る作業です。これは、瓔珞天華(ようらくてんげ)といって仏像の天蓋を天上界の霊妙な花で飾ったものを表すようです。

天井に飾られたハナは、本供



天井に飾られたハナの下での
四十八夜念仏

養に集まった人々が持ち帰り、家々の戸間口に飾られます。四十八日間の祈りを込められたハナは、各家の軒でこの家と人を守ることになりました。

このうちの数本が郷土館にもやつてきました。昭和五十一年念仏堂のすぐ近くに住む当時八十八歳の古瀬さんという方が墨書した念仏帳とともに、民俗展示の「信仰」の棚に並んでいます。四十八という数は、阿弥陀如来がまた法蔵比丘尼であった頃衆生を救うために四十八の誓願を行ったことに由来するものです。

この念仏は、元禄の頃に始まったと「四十八夜念仏」の中で語られています。上津具は根羽との間にある松原御料林の麓の村として幕府直轄領であったため、徳川家への信頼が厚く、阿弥陀信仰を勧める徳川家に応じて、この念仏は始められたのでしよう。家康の祖父親忠が戦死者の霊を弔うため、大樹寺を創建したときの様子を同念仏の中で次のように表現しています。

「すなわち同寺のご本尊、敵たりとも魍魎の世のため菩提を問うならば 如来の四十八願にたちまち静まり給うなり。四十八夜の念仏は この時始まり給うなり。」

初めは敵の戦死者の霊を弔うための念仏でしたが、やがて、徳川家が栄えたように、信仰す

る村々に繁栄をもたらすものとされたようです。



ハナと念仏帳

念仏が終わると、家々から持ち寄った手作りの漬物やお菓子をつまみながら、話に花が咲きます。昔から、ともすれば雪に閉ざされがちになる寒の時期にこの念仏が行われるのは、出歩くことの少ないこの時期だからこそ、人と人とのつながりを大切に、残されてきたものと思われまます。

津具には、寒念仏を続けている地区が、五、六箇所数えられるようです。全国的には石造りの四十八夜供養塔が残されている地区があるようですが、実際に念仏を実施しているのは大変珍しいようです。

(奥三河郷土館

館長 平松 博久)